

尾崎紅葉『金色夜叉』による新作能『貫一・お宮』
独吟発表：解説（熱海市起雲閣・2018年1月27日）

Konjiki-Yasha or Kan'ichi and Omiya
as a Noh Play: Recital Lecture

宗片邦義

MUNAKATA Kuniyoshi

Abstract: This is the introductory lecture given on January 27th of 2018, celebrating the 150th anniversary of the birth of OZAKI Koyo, preceding the present writer's premiere recital of his *Kan'ichi and Omiya* as a Noh play based on OZAKI's *Konjiki-Yasha*, the most popular novel in the Meiji Period of Japan.

Key words: 新作能、尾崎紅葉、『金色夜叉』、『貫一・お宮』、熱海市
New Noh play, OZAKI Koyo, *Konjiki-Yasha*, *Kan'ichi and Omiya*, Atami

最初に、本日この会場にお見えになっておられません、この発表会実現にまでお導き下さいました鈴木徳治（とくはる）先生（元熱海中学校長で、本日本主催の「伊豆の日金・熱海を語る会」会長、90歳）に心より感謝申し上げます。また本日は、ご多用の市長さんをはじめ、かくも大勢の方々にお出でいただき、誠に有難うございます。

さて、新作能『貫一・お宮』謡いと語りの前に、能について簡単にご説明いたします。

能は日本最初の演劇戯曲で、14・5世紀に観阿弥（かんあみ）・世阿弥（ぜあみ）父子によって大成された。英語ではドラマというよりはオペラと言った方が外国人には分かり易い。というのは詞（ことば）で語る部分もありますが、謡う部分が多いからです。かつてスコットランドのグラスゴウで日本能楽団の能公演を行った際、ホテルの人達から、「日本のドラマというので日本語が分からないから行かなかった。オペラならスコットランド人は大好きなのでみんな行きたかった」と言われたことがあります。

能は謡いと舞いの詩劇とも言えますが、精神性とか宗教性とかが特徴で、「能は祈りの芸術・救いの芸術」とも言えます。古典能約 200 番のすべてがそうだとは言えませんが、観阿弥・世阿弥の意図は、「天下太平・壽福増長」だった。世阿弥の『風姿花伝』(ふうしかでん)に書かれている。今ならば、「世界の平和」と「万人の幸福」です。熱海では地上の樂園とか地上天国ということばがよく聞かれますが、正にそれが能の目標です。

その手法は、禅の影響などもあって簡素・簡潔です。私は『ハムレット』や『オセロー』などシェイクスピア劇を能に翻案して公演していますが、複雑なシェイクスピア劇をそのエッセンスだけ取り上げて制作・上演します。分かり易く面白く。ただし簡素・簡潔は省略があったり暗示的・象徴的だったりしますから、必ずしもリアリズムではないので、イマジネーションを働かせ、想像力をたくましくして聴き、観る必要があります。それが能を楽しむコツです。

よく知られている能の曲名は、鶴亀・高砂・羽衣・井筒・熊野(ゆや)・隅田川・葵上などでしょうか。羽衣は静岡の三保の松原、熊野は磐田(いわた)の熊野神社の熊野ですね。熊野というのは女性の名前です。ついでに、狂言は普通能と共に演じられる一般に軽い喜劇的な言葉の劇ですが、風刺的なものなどいろいろあります。

秀吉も家康も能や狂言を愛好し、一緒に舞台上上がったこともあるようですが、徳川時代には能は幕府の式楽となり固定化しました。またついでながら、文楽や歌舞伎はその後 17 世紀に生まれたもので、庶民のための芸能でした。能・歌舞伎・文楽が日本の三大古典芸能と言われますが、そして明治時代以降に作られた能が「新作能」と呼ばれています。沢山つくられています。

私はシェイクスピアの原文に能の節付をして、謡曲として謡います。古典能と同じ手法、同じ精神によるものです。MOA 美術館の能舞台でも『英語能ハムレット』を舞ったことがあります。私の最近の“Noh Hamlet”独吟独舞は短縮版ですが YouTube に入っています。英国マンチェスターの教会やチェ

スター大学で舞ったものです。また最近日本語の創作能を能楽師の方々に公演していただいています。『リヤ王』『ロミオとジュリエット』など。

さて、今年 2018 年は尾崎紅葉（おぎきこうよう）生誕 150 年ということで、彼の代表的小説『金色夜叉（こんじきやしや）』による新作能『貫一・お宮』を制作しました。今日これから謡いますが、あまり知られていない後半部分をお聴きになって、原作についての新たな発見があり、貫一がお宮を足蹴（あしげ）にしているモニュメントのイメージも一新され、さらに今日的なさまざまな問題について考える縁（よすが）となればと願っています。この作品が、熱海市の更なる発展に寄与できれば望外の幸せです。

・能は分からないと敬遠されがちですが、世阿弥が「見所（けんしょ）、観客ですね、を本にすべき」と述べたように、観客の為に、分かり易く、そして楽しく、というのが私の考えです。ですから、耳から聞いて分かる言葉で創ったつもりですが、台本を配布していただきましたから、それもお覧になってお聴きいただきたいと思います。もし途中で眠くなりましたら、どうぞおやすみ下さい。いびきをかかないように。

私の制作の楽屋うちを少しお話ししましょう。

紅葉の原作は風俗小説で、今では使われない言葉や当時の汚らしい言葉づかいが頻繁に出てきます。しかし能は、どんな役柄どんな場面でも、汚らしい言葉や醜い衣装や、泣いたりわめいたりを嫌います。（これが私が能を愛好する理由の一つかもしれません）。ですから原作は『読売新聞』に 6 年間にわたって連載された大長編小説ですが、大事な筋に関係のない説明やそうしたシーンはすべてカットし、間（アイ）狂言に簡単に語らせました。

また能は、前場（まえば）と後場（のちば）の二場構成が普通で、前場は例の熱海の海岸のシーンで、その後アイ狂言が登場して、普通の言葉でいろいろ説明します。私はいろいろ考えた末、主人公貫一の友人をこれにあてました。紅葉が何か月も、まるでこれでもかこれでもかと思われるほど書き続けたいくつ

の込み入ったシーンを、今日は数分で片付けることになります。

序でながら、熱海と縁の深い坪内逍遙のシェイクスピア戯曲の翻訳も、紅葉の文体に似ています。夏目漱石は逍遙訳の『ハムレット』上演を観て、シェイクスピア劇は詩劇であって、日本語に翻訳できない。それをどうしてもやるというなら、「別格の音調」の能の謡いでやれば面白かろうと朝日新聞の劇評に書いた。明治44年(1911)です。漱石は自分も宝生流の謡いをたしなんでいましたね。『高砂』など好きだったらいい。

私の『貫一・お宮』ですが、前場の熱海の海岸の別れの場面の後、間(アイ)狂言による「アイ語り」があって、後場は、原作の最後で、シテ貫一の「われ夢むるにあらずや」と始まります。能が歌舞伎その他の芸能と異なる点の一つは、夢の世界や死後の世界を舞台上に表現することです。想念とか霊的世界とか、普通は目に見えていない世界を扱う点です。死後の世界などもそうです。

後半についてちょっとご説明しますと、宮と別れた貫一は無慈悲な高利貸しになるのです。そして実はその後、もう一人女性が現れたり、特に後半はきわめて複雑な構成で、結局作者は未完のまま35歳で病没してしまうのですが。私はそうした場面を、能として完結するのに、貫一が夢見る最後の場面を取りあげました。宮は結婚後、貫一に謝りの手紙を沢山送るのですが、そして許しを乞うのですが、貫一は訪ねてきた宮の悲痛な叫びを聞いて、彼女を許すという最後の場面を取り上げました。これは原作から考えられることです。

能のお囃子は笛・小鼓・大鼓(おおつづみ)・太鼓(たいこ)ですが、曲の途中または終わり近くになって太鼓(たいこ)が入ってくることがあります。多くの場合それは何か幸せな結末ハッピーエンドの知らせにもなります。ただし今日はお囃子はありません。今日は能公演ではありませんので、舞いもありません。シテ貫一もツレお宮も、今日は全部一人で謡ったり語ったりしますので、皆様には、想像力を逞しくしてお聴きくださるようお願いいたします。